
詩集 21世紀の夕食

西野了

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詩集 21世紀の夕食

【Zコード】

N1408F

【作者名】

西野了

【あらすじ】

2001・9・11アメリカ同時多発テロ以降、書き綴った詩

新たなる言葉を求めて

「僕は途方にくれていた」

1 3 · 9 · 2

僕は途方にくれていた

金もない

仕事もない

友達もない

才能もない

未来への明るい展望ももちろんない

毎朝、朝から酒を飲んで

近所の人から嫌がられながらも、ウロウロして・・・

髭は伸び放題

風呂にはいつも入ったのだろう

僕は途方にくれていた

世界 夕食 誕生日に死を想つ

「世界」 3・9・29

2

私の国では

人の命は5000円

15000円の借金のため、人間が3人死んだ
でも

世界では、もつと安く人の命が買える

いつたい

いつから

そもそも

世界は

歴史は

こんなもので

人は知らん振りしているだけ

だって

それが

生き延びる手だてなのだから

「夕食」 3・9・29

3

夕食時

突然ミサイルが飛んできて

爆発し家族が死んだ

こんな場面が現実にある

転職に失敗しただけで

数日間

頭が真っ白になってしまった僕が
こんな形で家族を失うと
生きていけるだろうか

幸いにして僕の台所には

今のところ

ミサイルは飛んでこないけど

砂漠の国では

これが現実なのだ

「誕生日に死を想つ」 3・10・1

4

僕らはいつ死ぬのだろう?
生きていることは死ぬため
死ぬために生きている
殺されたり

交通事故で死んだり

癌に蝕まれて死んだりすることは
寿命じゃないの?

もつと生きられるはずなのに
死んでしまうのは

いけないこと?

2歳の子どもがボートで事故死した

何もわからず

溺れ死んだ子は

どうして生まれてきたのだろう?

生後1週間で死んでしまった赤ちゃんは

何を成し遂げたのだろう?

僕らのまわりには

不条理な死であふれている

僕らは運命を選ぶことはできないのか

運命が僕らを選ぶ?

神が決めたこと?

「テレビ」と「つねの悪魔 夏 紫の残影 明日」

6

「テレビ」と「つねの悪魔」

テレビを2時間観ていると

疲労困憊になる

こいつは悪魔だ

耳に入ってくる音が

少しずつ脳を破壊していく

目まぐるしく変わる映像は

いつたいどこの世界のものだ?

生活の役に立たないことばかり映し出し

僕の思考回路を混乱させる

心の平安がほしければ

そこににある椅子で

思い切り

ブラウン管を

叩き割ることだ

世の中がかなり静かになる

「夏」 3・10・2

7

夏になつたら
海辺の家で暮らわう
僕は昼間からビールを飲み
君はオレンジジュース?
青い風と

波の音

夏の陽射し

これ以上いつたい何を望めばいい?

夜になれば

流れ星をさがし

ロックンロールを聴こづ

僕はやつぱりビールを飲み

君も今度はビールを飲む

ねえ

僕らは永遠に

ティーンエージャーみたいだ

「紫の残影」

3・10・3

8

夕焼けで

山の端が

紫色に浮かび上がる

美しくて少し哀しくなる

僕がそれをつかもうとしても

それははるかな高みにあり

そのことがまた

僕を少し哀しくさせる

ヒトとして生まれてきて

その光景を見ると

少しホツとする

たまにはいいことがあると

「明日」 3・12・3

9

私は一人

全てが破壊された世界

それが解放？

歌もなければ
絵もない

パンもなければ
水もない

日の光は眩しそぎて

風は心地よさを運んでくれない

紫の夕焼けも心を打たない
人は
絶望した時
死ぬのだ

グルメ 余り物 テレビのタレントが・・・

「グルメ」 4・4・2

10

今

おいしいものを食べるといふことは

それだけ

たくさんの生き物を殺していくといふ」と
海を渡つて、山を越えて

食材が届く

どうして

ヒトは

それほどまでに

おいしいものを食べたがる

食べれば食べるだけ

心がやせ細っていく

「余り物」 4・4・11

11

僕のまわりには

あまりにも余分なものが溢れていって

そいつらが僕を蝕んでいる

たとえば

この体

ほしくもないのに、美味しさに騙され

際限なく喰い続ける

余分なものは

いつか

毒となつて

僕を襲うだらう

たとえば

この頭

何の役にも立たない情報が

僕の脳を

狂わせる

切り倒された

木の株の横から

新しい芽が

数本

再生?

転生?

土から絶え間なく

芽吹いていく

命が無数に現れて・・・・・

僕は

彼らと同じだと

思いたい

敬意をもつて

「テレビのタレントが僕を見て笑つている」

4・?・?

12

テレビのバラエティ番組を見ていると、頭痛が起るようになった。

同じようなタレントが同じような内容で大笑いしている。いつたい
何がおかしいのか、僕には全然わからない。このタレントたちはき
つと僕を指さして笑っているのだ。

テレビを蹴飛ばして、こなごなに壊したら、どんなに気持ちがよい
だろう。

だけど僕はテレビを見なければならない。

テレビはこの世界と繋がっている、数少ないもののひとつだからだ。
リモコンでチャンネルを変える。プロ野球を見る。
ジャイアンツ対タイガース・・・・・
ジャイアンツが負けている。

金持ち 宇宙の中の僕 僕は

「金持ち」 4・5・12

13

俺は金持ちだ

俺は何でも持っている

マイホームだってマイカーだって

ステレオ、テレビ、DVDビデオ、CDラジカセ、パソコン、ケー

タイ電話、エアコン

トイレだって暖房便座にウォッシュキューレット

朝食はトースト2枚に紅茶、目玉焼き

フルーツにカズピ海ヨーグルト

昼食は愛妻弁当

夕食はバランスのとれたメニュー

俺は何でも持っている

モダンジャズのCDコレクション

村上春樹のハードカヴァー

ヤマハのアコースティックギター

猫も飼っているしウサギもいる

庭には紫木蓮にいろいろな花

俺は何でも持っている

でもまだ足りないと

テレビも新聞もインターネットもそいつ言っている

俺は何でも持っている

「宇宙の中の僕」 4・5・20

14

胸の中の

驕りを
不満を
嘘を
焦りを
いやらしさを
嫉妬を
妬みを
憤りを
怒りを

僕は

僕は哀しみの涙で
少し
救われた気がする

世界は美しいと
気づいた

宇宙なんて
感じることすらできやしない
でもある時

「僕は」 4・5・21
15

卵に押し込めている

何かの拍子で

それらが

流れ出て

もう少しで

僕は

爆発しそうになるけど

何とか

やりすごしているのは
ヒトとして生きたいと
願っているからであるつか？

夕暮れ 死ぬ 果実 砂の国 降臨

「夕暮れ」 4・5・25

16

坂道を下りていくと
君が待つている
暮れなずむ街は
全てオレンジ色で

僕は

ここで生まれ

ここへ還つていいくのだと

全て知っていた

この街を
君と歩けたら
それだけで
僕は

生まれてきた意味がある

「死ぬ」 4・5・27

17

人が死ぬ
がんで
心筋梗塞で
脳卒中で

人が死ぬ

自動車にはねられ

飛行機が墜落し

船が沈み

人が死ぬ

放射能で

原爆で

水爆で

人が死ぬ

闇の中で

家の中で

学校で

人が死ぬ

戦争で

侵略で

弾圧で

人が死ぬ

病院で

街の中で

職場で

人が死ぬ

僕の心の中で

「果実」

4 · 10 · 31

土に毒がしみ込み
水に毒がまざり
空から毒が降り注ぎ
虫さえ食わぬ

果実は

美しく

僕はそれを食べ
長生きしている

「砂の国」

4・11・2

19

首が切り落とされ
心臓を打ち抜かれ
腹を切り裂かれ
炎に焼かれ

大地は枯れ
風は止まる

僕は

テレビを観ながら
美味しいごはんを食べ
あたたかい毛布にくるまれ
ぐっすり眠る

「降臨」 4・11・10

20

空から光が降りてきて
僕は自分のちっぽけさを思い

空の

高さが

拡がりが

深さが

僕を消し去る

そして

僕は

僕が存在している」とこ

涙するのだ

黄竜 北斗七星 冬の道 金

「黄竜」 4・11・10
20

天空に

黄金の竜がのたうちまわっている
奇跡を目撃する

「北斗七星」 4・??
21

夜明け前
北斗七星を君と見た
紫に染まる空
白々と明けゆく
不安そうな瞳で君は
それでも輝く北斗七星を見た
美しいとも
哀しいとも
言わず

僕らは北斗七星を見ている

「冬の道」 4・12・7
22

冬枯れの木々が
陽光を映し返し

僕のまわりは

黄金色に満たされる

その瞬間

世界に包まれてることを知る

「金」 4・12・8

23

俺に金をくれ
俺に金をくれ
そうすれば

人も

車も

家も

土地も

地位も

名譽も

力も

街も

国も

この世の全てのものを
手に入れることができる

だから

俺に金をくれ！

「永遠なるものに対する憧れ」

24

5・2・5

僕らは

永遠を求めてはいない
不变を愛してはいない

移りゆくものを認めているのだ

生の中に死を見てとるのだ

家が朽ち果て

森が枯れ

人が年老いていく

僕らは

その悲しみを

刻み込む

そして

心の震えの中に
甘味なるものを
僅かに発見する

「覚醒」 5・2・5

僕の上には
雲があり
空があり
星がある

僕の下には
大地があり

この星がある

僕のまわりには

風があり

光があり

香りがある

山 川 影

木 花 草

鳥 蝶

ヒト

完全なる調和を発見したとき

誰に感謝すればいい?

絶望 無機 君が望むもの 在る

「絶望」 5・2・28

26

人は

世界に絶望する

あまりにも激しい移り変わり

永遠は何もなく

美しきものは

一瞬の光

ああ

僕は何も見えないのだ

愛すべきものたちのオーラが

耳をすませば

天上の音楽が鳴り響いているのに

いつも

自分自身に絶望している！

「無機」 5・3・11

27

祈りをささげる大地もなく
心の色を映す風も吹かない
空は低く宇宙から隔絶し
青い水を湧き出す泉は

すでに枯れ果てた
閉ざされた空間は
僕に心を捨てろと迫る
機械のように働き
サプリメントを食む
灰色のナイフで
手首を裂くと
透明な血が僅かに流れた
僕は叫ぶ
「まだ完全ではない！」と・・・・・

「君が望むもの」 5・3・11

28

君が瘦せてほしいと言つのなら
僕は絶食しよう
君が「愛している？」と訊けば
僕は舌が乾くまで「愛している」と言おう
君が「幸せ？」と訊けば
僕は「もう今すぐ死んでもいい」と答えよう
今日
もし
世界が終わるとしたら
二人で夕焼けを見よう
オレンジの光を浴びて
君ということ
それは
おそらく
永遠なのだから

天に一人

地に一人

在る

存在する

声なき声に耳をします

光奪われし者に光を

世界の闇の片隅に

閉じ込められた者達

ああ

僕らは

歴史の傍観者なのか

死にゆく者

滅びゆく

壊れゆく者

狂える者

生の中に死が満たされている者

何故

僕らが存在し、彼らが存在する

何故 何故

僕は悪者？ 空自由と市民主義として正義のために

「僕は悪者？」 5・3・15

30

街を歩いているとスーツを着たおじさんがやつてきて
「君の仕事は何？」と訊いてきた。

「町工場で機械の部品を作っている」と答えると、おじさんは首を振り、

「そんな仕事、いつ潰れるかわからないよ！ 今からは資格をとつて、いい会社へ転職しなきゃあ…」と黙つてカタログと名刺を置いていった。

家で本を読んだいと、化粧をまかづつけめたおばさんがあつてきて、

「お客様は今、どのよつの金融商品を持っています？」
と訊いてきた。

「郵便貯金だけしている」と答えると、おばさんは驚いたよつで、「今からは投資ですよ！ 投資！ 若い人がチャレンジしなきゃあどうするんです」と言つて、カタログと名刺を置いていった。

喫茶店で友だちとコーヒーを飲んだいと、友だちが、

「彼女どどこまでこつた？」
と訊いてきた。

「今度の日曜日、彼女と動物園でデートするのだ。彼女のつくった鶏のから揚げは美味しいんだ」と答えると、友だちは軽蔑の眼差しで、

「お前は小学生か！」この本読んだら、すぐ彼女を落とせるや」と言つて、カラフルな表紙の本を置いていった。

僕は今の仕事が好きだし、お金にもそんなに困っていない。

彼女はおとなしいけれど、とてもやさしくて、一人で歩いている

だけでとっても幸せな気持ちになる。

いつたい、僕は、何か悪いことをしているのだろうか？

「空」 5・3・25

31

満天の星々

冷たい光が降り注ぐ

手を組み合わせ

祈る

僕の意識は

空高く

かけのぼり

この惑星を見る

無限に広がる漆黒の海

けれど

僕は孤独ではない

僕を包むものは何だ！

青き星よ

君が僕に語りかける

赤き光が僕を照らす

僕は海の香りをかぐ

僕は緑の風を感じる

僕は大地の確かさを見る

僕は命のひとつひとつを見る

僕を中心に

宇宙は回っているのだ

「自由と民主主義そして正義のために」

5・3・17

田つきの悪い男がいたので、そいつをぶん殴りました。
それは良いことをしました。

盗みをはたらいたとした女をナイフでブスリと刺しました。
盗難防止です。

人を襲おうとした奴をピストルで撃ちました。
正当防衛です。

他国を侵略すると思われる国と戦争をしました。
国際平和の為には当然のことです。

永久に争いごとを起こさないために、核兵器を使用しました。

自由と民主主義そして正義のために
すべては

自由と
民主主義

そして
正義の旗のために

死 老い 生きる」との意味 白田夢

「死」 5・3・18

33

僕は死ぬ

100年後には確実に死んでいる

僕は死ぬ

50年後にはおそらく死んでいる

僕は死ぬ

30年後には死にかけている

僕は死ぬ

10年後には死んでいるかも知れない

僕は死ぬ

ひょっとすると明日の朝
目覚めないかも知れない

何も見えず

何も聞こえず

何も嗅ぐこともできず

何も考えられず

何も感じられず

死ぬとはそのようなことなのか

では

なぜ生きているのだらう

永遠の死はあっても

永遠の生はない

突然訪れる死

徐々に迫りくる死

死を見続ける者達の
声に耳を傾けよ

その声を聞くことでしか
生きる術はない

「老い」 5・3・18

34

生きていいくことに

消耗する

息をすると

疲れ・・・・・

豊かな山並みが
視野に入ると
嘆息する

生は間違いなく
死に向かっているが
時を経るごとに
命が削られしていく実感があるのは
年老いた証拠なのか

「生きることの意味」 5・3・?

35

生きることに意味がある

勉強ができなくても

走るのが遅くても

歌が下手でも

生きることに意味がある

仕事がテキパキできなくても

女の子にモテなくても

友だちからバカにされても

生きることに意味がある

一週間に一度も嬉しいことがなくても

誕生日に誰も祝ってくれなくても

哀しみに押しつぶされそれでも

生きることに意味がある

朝陽は君を照らし

あたたかな風が吹きぬける

君を愛する人は時を待ち

君の為に涙する人たちとめぐり逢うだろう

やわらかな雨は君を包み

星々の光は祝福しているのだ

生きることに意味がある

「白日夢」 5・4・?

36

気がつくとテレビの画面を蹴つていた。
ジッジッジッと変な音が聞こえた。

こいつはいつもいつも下品な音を垂れ流し、馬鹿面をしたタレントたちが騒いでいるのを、映していたのだ。これで知ったかぶりの主張がくるくる変わる評論家の顔を見なくてすむ。

次はデスクトップのパソコンにとりかかねり。う。

そのときドアが開き、女が呆けたような顔で俺を見つめていた。
久しぶりに俺の顔を見て、どんな表情をつくってよいか、わからな
いようだったので、俺はムカついてとりあえず顔面に右ストレート
を叩き込んでやった。

奴は鼻と口から血を流し「ヒィー」と耳障りな声を出し、どこかへ
行ってしまった。

どうして、世の中には不要なものがばかり溢れているのだろう。

俺の胸の内に怒りが渦巻いているのは、この世界を汚した馬鹿共が、
何の反省もなくのさばっているからだ。
ひとつひとつ整理してゆかねばならない。

世界2 同胞 嘘1 イラク 少年たち

「世界2」 5・5・10

36

世界は「」つしていなければならぬ
たとえば土
うつかりすると転んでしまうよつた地面

世界はたくさん色がなければならない
たとえば初夏の山
燃え立つような幾千の緑

世界は街の中にもなければならない
たとえば人
美しい言葉と素敵な笑顔

世界は僕のまわりにもなければならない
たとえば
木の机と鉛筆と古いノート

世界は
現実として
ここにある
まぎれもなく
ここに
ある

「同胞」 5・5・14

世界とつながっているとしたら

僕は罪人だ

野蛮人だ

人殺しだ

罪のない子どもたちに

放射能を浴びせ

苦しみのうちに死なせている

汚れた大地は

半永久的に

よみがえることもない

どうして

黙っているのか

涙を流さずに

手を差し伸べずに

安穏と暮らしている

同じ惑星に住む

同胞たちの血と魂の叫びを

慟哭を

聞け！

嘘をつく

「嘘1」 5・5・16

38

平気で嘘をつく

君が傷つくことを知つて
嘘をつく

テレビに映る人は
嘘がばれているのに
嘘をつく

何だか偉そうに話す人は
形式的に嘘をつく

新聞も嘘をつく
ラジオも嘘をつく
パソコンも嘘をつく
週刊誌も嘘をつく
教科書「も嘘をつく

子どもも嘘をつく
困ったような顔で嘘をつく
早口で嘘をつく
泣きながら嘘をつく
悪いと思いながら嘘をつく

大人も嘘をつく
ごまかそうとして嘘をつく
当たり前のように嘘をつく

そして

僕たちは
その嘘を

本当のことだと思い込む

「イラク」 5・5・20

39

世界はイラクにこそある

砂漠の国で

人は死ぬ

爆弾で人間は吹き飛ばされている

放射能で大地は

半永久的に汚され

子どもたちは遺伝子を狂わされている

そこでは

人は
殺されるのだ

西暦2005年

超大国の欲望の餌食となり、血は流される

僕らは

同じ空に向かつて
祈りを捧げても

テロの黒煙は天に昇る

世界に住む一人として

僕は
罪を犯しているのだ

「少年たち」

5・5・23

少年たちよ
バスの停留所のベンチに座つて
語り合つている

少年たちよ
何がそんなに楽しいのだろう?

少年たちよ
紫外線をもろともせずに
熱を持つたアスファルトの上を
黙々と走る
その眼差しはまっすぐ前を向いている

少年たちよ
薄暗いゲームセンターで
ハンドルを握り歓声を上げている
少年たちよ
赤く染まった頬は
興奮の証だ

少年たちよ
君たちは五月の若葉なのだ
暴力的なその青いオーラは
とどまることを知らない

それでいい
その青き光は
僕らの救いでもある

つながる 進化 君は？ 終焉 モーツアルト

「つながる」 5・5・23

41

世界と何処かでつながっているかと訊かれ
ある人はパソコンでつながっていると言
う
ある人は神に祈りを捧げているときと言
う
また

ある人は白いボールを追いかけているときと言
う
ある人は愛する人を抱きしめて、エクスターを感じているときと
言つ
またまた

ある人は
ピアノの鍵盤をたたいて、美しい音が流れ出るときと言
う
ある人は本の中で、自分自身を見つけたときと言つた

世界とつながるということは
自分自身があるということ
自分自身があるということは
意識を垂直に立て
地面としつかりつなげること

「進化」 5・6・7

42

僕らは
150億年の到達点なのだ
永遠と思われる

時を経て

進化の頂点に立つ者よ

宇宙開闢から

この星が生まれ

数限りない

生き物が

試行錯誤し

ついに僕たちが生まれた

海も

大地も

空も

風も

僕たちを知っている

だから

僕たちは思い出さなければならぬ

世界は偉大な母であり

僕たちを祝福していることを

「君は？」 5・6・15

4 3

君は幸せか？

胸がときめいているか？

恋する人はいるか？

愛する人はいるか？

無邪気な子どもたちがいるか？

美しい音楽を聴いているか？

そのメロディを聴いていると

知らずに涙が流れているか？

喜びをともにする友人がいるか？

裏切ることのない仕事仲間がいるか？

一日をしつかり区切つて生きているか？

青くどこまでも青い空を見上げることがあるか？

雨が空から降つていると感じているか？

そして川となり、海につながつていると思つか？

大地を抱きしめたいと思つか？

君はこの時を生きているか？

「終焉」 5・6・25

44

世界は

もつ

とつくな

終わつてしまつた

遺伝子操作で

あらゆる生物のクローンを創り出し

太陽を凌駕するエネルギーを創り出し

半永久的に空間を狂わす放射能を撒き散らし

情報は操作され

唯一の価値が地球を駆け巡る

黄金の塔に住む人たちは
億万の屍に気づくことはない
貧しき者は声を発することもなく
闇の中に立ちつくす

朝日が昇り

風が流れ

大地が熱され

雨が降り

雲が動く

空は光を失い

無数の星が現れても

その風景は永遠に静止している

「モーツアルト」 5・6・30

45

神の御使いが

天上の音楽を奏でる

その調べは

いつも

空中を

自由に飛びまわり

僕から肉体の重みを消し去る

ああ

軽やかに

力強く

奔放に動きまわる

しかし

時が満ち

肉体が朽ち果てる時

その調べは

初めて地上に降り立ち

天に向かい咆哮する

神の御使いが人間にもどる時

土こそが

大地こそが

必要なのだ

そして大地に抱かれ

安らかに眠ることができるのだ

鎮魂の歌は

この大地から発せられる

「夢」 5・7・10

46

そこへ行くと

意地悪な顔をした女が
ヒステリックな声で俺に命令する
つまらないことを
役に立たないことを
ばかばかしいことを
やればやるほど仕事が増えることを

俺は目を閉じ

女の顔面に

矢のような右ストレートを叩き込んだ
小さな品のない鼻から
ミミズのような血が流れ
殺虫剤をかけられたゴキブリ」のように
意味もなく短い手足をバタつかせていた

俺は胃の中ほどから
笑いがこみ上げてきたが
唇をきつく閉じ
笑いを我慢する
すると背筋に快感が走り
全身が痙攣する

しづらしくして

目を開けると

女が不思議そうな顔をして
俺を見ていた

「僕らの休日」 5・10・3

47

今日は水曜日

僕らは3時限目の授業を抜け出して
どこか知らない街に行くことにした
初めてのデート

君はちょっとおしゃれをして
いつもよりセクシー

僕はボタンダウンにニットタイ
2人で並んで急行列車に座る
秋の陽射しは柔らかくて眩しくて
僕らは暖かくなる

「海」と君が小さく叫ぶ

「降りよう」と僕がきつぱり答える

誰もいない砂浜

名前も知らない海岸

夏の名残はひとつもなく
淋しさだけが漂っている

でも僕らはその淋しさが嬉しくて
まるで世界中で2人きりしか存在しないかのように感じる

そして、当然キスをする

君の柔らかくて素敵な香りのする体を抱きしめて
たくさんキスをする

今日のお弁当はスペシャルメニュー

君が夜明け前からつくり始めたスペシャルメニュー
潮の香りにミックスされて・・・

僕は口いっぱい頬張り、君は明るく笑う

「ねえ、本当に今、死んでもいいよ」

変なたとえを君は言う

女の子はやっぱりロマンチスト?

白く薄い雲が流れる

僕らは語り合いつ

幼かつた頃のことを

家族のことを

好きなミュー・ジシャンのことを

学校の噂話のことを

恥ずかしそうに夢のことを

そして海と空のことを

気がつけばオレンジ色の光が君を照らし

僕らの休日は終わりつつある

列車を待つホームは無人で

僕らは無口だけど

手のぬくもりを感じている

紫色の車体が僕らを街まで運んでくれる

君は眠ったふりをして

頭を僕の肩にのせている

「旅立ち」 5・10・27

旅に出よう

青い空の下

素晴らしい入道雲

縁のじゅうたんの先には

白い灯台

水平線はぼやけている

空よりも深い青が海

僕たちの旅は

果てしなく

行く先もわからない

でも君は

嬉しそうに笑っている

白い洗い立てのワンピース

日に焼けた顔に麦わら帽子

古ぼけた茶色のトランク

白いブレスレット

少しおしゃれな靴も白

あたたかな南風に

君のやわらかな髪がなびく

強く激しい陽の光が

旅立ちの時を知らせている

「抱き合えばいい」

5・10・27

49

抱き合えばいい
何かホツとするから
抱き合えばいい
何かわかりあえるから
あなたの肌のぬくもり
におい
吐息
あたたかい手のひら
何だか恥ずかしいけど
それでも
抱き合えばいい
好きなんだから

時が刻まれて
僕たちが積み上げてきたものは何か
哀しみ
いとおしさ
あきらめ
祈り
にくしみ
微笑
愛?
今

「記憶」 5・10・28
50

僕たちがいる場所を確かめるために

封印された

記憶の箱を開けよう

忘れてはいけない

忘れてはいけない

そこに

確かにあるのだ

幼き子たちの物語 淚 マイホームパパ どこへ 砂浜

幼き子たちの物語 5・10・28

51

慎ましくも楽しい夕餉の食卓に
自由と正義のミサイルが炸裂する
自分の命がなぜ消え去るのかもわからない
幼き子たち

理不尽な人生の遮断

歴史の闇に埋もれていく

僕らは

あきらめをもつて星空を見上げる

だが

語らなければならぬ

世界の影にある死を

物語として

完結させなければならない

僕らは

震える胸の内から

ほとばしる

血の言葉で

幼き子たちの物語を

語りう

「涙」 5・10・29

52

僕の心が汚れているから

涙がこぼれるのか

僕の心が醜いから

美しいメロディに胸が熱くなるのか

なぜ

孤独を求める

お前の弱さは見抜かれているのに

深い心の底にあるものが

最終的には

純粋であることを願う

流れる涙は

真実でなければ

僕にとって真実でなければ
どうして

生きてゆけるのだろう

「マイホームパパ」

5・11・7

53

戦争で

敵国の女や老人や子どもを

たくさん殺しても罪にはならず

さればかりか

勲章をもらっている

ミサイルを落とせば

自分の手を血で汚すこともない

そんな兵士が

家では優しい父親なのだ

戦争が大好きな国では

人殺しが

そこらじゅうに

うようよい

神様の目には

血塗られた手をした人間が

大勢映っている

最後の審判で

彼らは許されると思っているのだろうか？

それとも

自分は人を殺したとは思っていないのだろうか？

「どこへ」 5・11・14

54

僕の物語は終わっている
ずっとほしがっていたものを

手に入れ

そして

それよりも愛すべきものを
見つけ

手に入れた

しかし

物語は終わらない

生は

僕を

どこへ導くのか？

これ以上の

喜びが

安らぎが

魂の震えが

あるといふのか

「砂浜」

5 · 1
1 · 1
4

5
5

君の素足に
波が寄せる
砂が金色に反射し
僕は
君の素早い動きに惑わされる

君を 空 欲望 邂逅 道

「君を」 5・11・22
56

美しい調べが鳴つていると
君に口づけする

星が凍りつくよつに輝いてと
君を抱きしめる

夜が静かに深くなると

君を確かめる

風が目覚めのときを告げると
君の肩を抱いて歩く

僕は心が動くと
君を見る

「君」 6・4・27

57

遠いところから

「タスケテクレ、タスケテクレ、タスケテクレ

僕は立ち上がり

白っぽい空を見上げる

同じ星にいる」とはわかっている

僕は君を助けたいのだけど

「タスケタイ タスケタイ タスケタイ」

だけど

僕は

もう

とつくな

絶望しているのかも

しれない

なんとなく

息をしているだけなんだ

無様に生きている

「欲望」 6・6・20

58

うるさい

頭が痛い

どこへ行つても

つきまとつてくるやつ

電車に乗つても

自動車を運転していくも

家にいても

レストランで食事をしていくも

ベッドで寝ていても

そいつはやつてくる

「あのことはどうなつたか、知っていますか？」

問い合わせてくる

「世界中の誰もが興味津々なのに、あなただけ無関心を裝つていま

すね

「うるさい！」

俺はそいつから逃れるために

心臓が破裂して口から血を吐きながら走った

「あなただけですよ。全世界の中で、ただ一人知らん顔しているのは」

そいつは不思議そうな顔で俺を見た

嘘つきめ！

すべての人間がお前のことだけ考えているはずない

「あなただけですよ」

そいつは俺の耳元でささやく

俺は人差し指を思い切り耳に突っ込んでやつた

そして

雄たけびを上げながら逃げるのだ

「邂逅」 6・6・23

59

僕らは

生まれ変わり

再びめぐり会えるのだろうか

無数の星が流れ

風が巡り

花は散り

音が止み

光はその輝きを失つたとしても

僕らはめぐり会えるだろつか

世界が終局に向かっていても
すべてが死につつあつたとしても
そして蒼い闇がすべてを覆つたとしても
僕らはめぐり会い
この宇宙で再生することができるだらうか
死してなお
再生することができるだらうか？

「道」 6・7・7

60

長く細い道を
君と歩く
その道は石ころがいっぱいあり
水たまりもあり
雑草も生えている

風が吹く
君の茶色に輝く髪が揺れる
夕暮れは
天空の半分を薄いオレンジ色に包み
僕らを悲しくさせる

また風が吹く
草原は波をつくり
僕らを飲み込もうとする
いつの間にか
蒼く深い闇に覆われ
僕らは

僅かな街灯の光をたよりに歩いている

どこに行くのだろう？

僕は誰に言つともなしに訊く

君はやさしく笑い返し

僕の右手をあたたかく

意外と力強く

握り返す

長く細い道を

君を一人で歩く・・・・

物語の始まり 回転する世界 風が止まるとき 海の見える街 神が与えたもの

「物語の始まり」

6・7・11

61

自分自身を失いつつある僕は
夏を待ち焦がれる

暴れそうな雲が僕に襲いかかる
熱線は情け容赦なく降り注ぎ
むせかえる大気の中を

僕は歩く

背中から胸から
大腿の裏側から
こめかみから
汗は流れ落ちる

僕は水を飲む

夏の青い空がある限り

新しい物語が始まる

僕は
いつまでも
少年のままだ

「回転する世界」

6・7・12

62

休もう

世界の隅っこにあるふきだまりで

眠ろう

異臭のするボロ布のベッドで

遊ぼう

落をこぼれた二三の眼をした奴らと

世界はぐるぐる回っている

死ぬ氣で走らないと

あーとこ、隣に振り落とされて

宇宙の果てまで飛んでしまってしおへ

青白い皮膚に落ち窪んだ瞳

シャツの襟は油まみれの汗がしみついて

屍は累々とあり

レーベルの上に立たれらを踏み越えていく

血にぬれに升上たて

立た玉無れど縫わぬて」小山

ヨハニ三章二節

世界は狂氣の叫びをあちこちで回りてゐる

知つてゐるくせに

知つてゐるくせに

シッテイルクセニ

シッテイルクセニ

シッテ・・・

僕はここにいる
僕はここにいるよ

僕はここにいる
僕はここにいるよ

「風が止まるとき」

6・7・26

63

僕の心は

生まれたときから
いつも寒々としていて
虚しい風が吹いていて

腹の底から笑った瞬間も

一生懸命怒ったときも

鼻がつーんと痛くなるほど泣いたときも

頭の中が白くぼやけたときも

いつも乾いた風が吹いている

自分自身であることは不可能だ

みんな嘘つきで

僕も嘘つきで

嘘をつかない正直者は馬鹿で

馬鹿な正直者は殺される?

ヒトの顔をした血を吸う奴らに殺される?
そう、決まっていることだよ

だけど

君は僕を怒らせる

君は僕をイライラさせる

君は僕を呆れさせる

君は僕を悲しくさせる

君は僕を傷つける

君は僕を落胆させる

そして

ときどき風が止む

僕はまだ生きている

「海の見える街」 6・7・29

64

海の見える街に住んでいると
ときどき素敵な出来事がある
まだ夏の匂いが少し残っている日曜日の午後
僕は女の子と出会う

君は麦わら帽子と水色のワンピース
白いサンダルは手に持つて
砂浜を歩いていた

僕らは海を見る

元気のない波が押し寄せて
引いていく
雲は少し空と混じり
曖昧だ

ほんの少し冷たさを含んだ風が
君の前髪を通り過ぎる

君は夏の終わりを告げるために現れたの?

僕は少し不満だけど
妙に納得した

君と二人で

また夏を待つことにしよう

「神が与えたもの」

6・7・2

与えられたものを
むさぼり食らうと
少しずつ毒が脳を侵し
わけがわからなくなる

それは危険なもの
あなたはよだれをたらし
うつろな眼をして
笑っている

ただあてもなく歩き
彼の言いなりになり
教えられた歌を唄う

選び取ることを忘れ

ただぼんやりと聞いている

鈍い光を放つ眼は

限定された世界を眺めている

あなたは狂つて死んでしまうのか
狂う前に死んでしまうのか

わからない

美しいものが覆い隠された場所では
毒に侵された脳の方が
都合がよい

おそらく
都合がよい

狂氣 家 夜 宝物 嘘 2

「狂氣」 6・9・12

6 6

僕がここにいることができるの
は君がいるからで

君を失うと

僕はたちまち

どこかへ行つちまう

出口のない深い森の中

蒼い海の底

灰色の荒地

光のメガロポリスを見下ろす天空

ここではないどこか

夜の闇は永遠に続き
僕はずつと眠るだらつ

次の日も

次の日も

そして

夢を見ることがない

いつも

夢を見ることがない

「家」 6・9・16

6 7

いつも冷たいナイフを突きつけられている

いつも薄い空気の中で呼吸している

目に映るものは暗く色褪せて、狭つ苦しい

僕の声は他人の声のようで・・・

ずれている

ずれている

明らかにずれている

時の流れに遅れているのか

時の流れに苛立っているのか

それすらもわからず

年をとる

存在自体が映画の1シーン

この不器用な手は

何も書くことができず

何も描くこともできず

涙をふくこともできず

まるつきり機能しない体

どうして生きているのだろう

どうして死ねないのだろう

僕は考え方らずで

形而上学的で

享楽家で

怠け者だからだ

ごまかし続けるペテン師なのさ

ああ

でも本当はまともになりたいのさ

いつか自分の家が見つかると夢見ている

「夜」 6・9・22

68

永遠に続く闇の中で

君は血の涙を流し続ける

小さな両手を差し伸べても

その手をつかんでくれる人はいない?

孤独と呼ぶには

あまりにも深く暗い夜

時は駆け抜けっていくはずなのに

昨日も今日も明日も

そして次の日も

すべて同じ色に塗り潰されて

君は消えていく

いつの日か希望という光が

本当に

君の胸に生まれるのだろうか

君が消え去る前に

君は新しい言葉を見つけることができるのだろうか

すべてのものが敵意を抱き

君すらも君を抹殺しようとする

絶望とはそういうものだ

だが君は血の流れる音を聞く

無音の闇の中

その音だけが響く

いつの日か君は気づくかもしない

君自身が光だということを

君自身が希望だということを

君は信じられないかも知れない

君を愛する人は知っている

君は光であり希望なのだ

「宝物」 6・9・24

69

お前は自分を殺している

時を蝕み

少しずつ失い

一日を呆然と過ごす

何をやってもいいし

何もしなくていい

僕は確実に死につつある

寒いし

冷たいし

熱くて

鬱陶しい

疲れていて

不快だ

いいことなんてひとつもない

悪いこともないし

悲しいことはたくさんある
僕は狂つているし

君たちは馬鹿だ

君たちは知つているの？

世界には何もないってことを

そう

何もないんだ

ナニモ ナインダ・・・・・・

だから

僕はできる限り目を見開いて見た

耳をすませた

匂いを嗅いだ

何もないんだ

すべては錯覚、幻想

でも、お前は

美しいものを見つけるかもしれない

美しいもの

世界の成り立ち

僕は死につつある

「嘘2」 6・9・26

70

嘘をつく

テレビはすぐ嘘をつく

小さな世界を全世界のように放送している

新聞も嘘をつく

訳のわからないように嘘をつく

週刊誌ももちろん嘘だらけ

薄い紙のような面白さのために嘘を書く

大企業の社長さんも嘘をつく
ときどき嘘がばれて、カメラのフラッシュの前で上手におじぎをする
一番エラい人も嘘が大好き
テレビに出るときは嘘は言わないけれど
みんなが注目していないところでは大嘘つき
だから

大人はみんな嘘つきだ

子どもも上手に嘘をつく
さわやかな笑顔で
良い子の仮面をかぶつて
嘘をつく
血の涙を流しながら
手首をかみそりで切りながら
心臓をわしづかみしながら
脳が重くて沈みこそうになりながら
自分を守るために
嘘をつく

坂道 終わりのない道 いつか あなた 雜感

「坂道」 6・9・28

71

子どもたちは難しい算数の問題に頭を抱え嘆息する

若者達は足を引きずりながら、薄笑いを浮かべさまよっている

妻は灰色の顔で夕食をつくる

老人は自分で右手を傷付け、血を流している

僕はといえば

重くなつた頭を精一杯の力で支えながら

わけもわからず、1日を消費する

みんなフラフラして

なんとか自分自身をつかもうと頑張っているのだけれど

僕が自分自身であることが

どうしてこんなに難しいのだろう?

君が君自身であるために

何が必要なのだろうか

1 + 1 が 2 でなければならず

すべては白と黒しかない

時間と空間は限定され

僕たちは閉じ込められている

あまりにも多くのことを知らされると

頭は細かく分断されるし

使い捨てのモノばかり溢れている

僕のこの手には何も残らない

お金があつても面白くないし
誰かと話をしたって意味もない

坂道が続く

夕焼けの街並みを歩いているのは
まぎれもなく僕自身だったのは
いつだったのだろうか

「終わりのない道」 6・9・30

72

僕たちは終わりのない道を歩いている
僕たちはなぜ生まれて死んでいくのか
生れ落ちてすぐ死んでいく人もいれば
100年を超える時を生きる人もいる
虐げられ蔑まれ、いいことなど数えるほどしかない人生もあれば
幸福に包まれた人生もある

全ての人生に意味があるのか

僕たちの生存はいったい何につながっているのか?
時の始まりから常に

僕たちは罪を背負つてきた

動物たちを殺し

草花の実りを奪い

大地を削り取り

空を海を汚してきた

人々は殺し合い、支配を繰り返し

神の言葉は欺瞞となる

無機質な建造物が世界を埋め尽くそうとしている

なぜだろう？

それでも、それでも

僕たちは光を信じ

胸のうちに新しい歴史の扉を開ける

1人また1人と

新しい時を刻むのだ

僕たちは

終わりのない道を歩いている

「いつか」 6・10・3

7 3

いつか
すべてが

無に帰す時が来ても

僕たちは

確かに

ここにいたと確認しよう

宇宙が

光速で

拡散しようと

永遠の時を刻もうとしても

ひとつ始まりには

ひとつの終わりがある

僕たちは

宇宙から生まれ

宇宙へ帰つて行く

僕たち1人ひとりが

存在した証は

物語として語り継がれるはずだ

宇宙開闢からの記憶は

僕たちの遺伝子の中にある

広がりゆく宇宙は

僕たちの意識と同調する・・・・・

「あなた」 6・10・4

74

あなたが逝つて

何度春の風が吹いたことでしょう

あたたかい風は

生命の息吹を伝えてくれるけれど

あなたがいたということを想い起こし

私は涙にくれるので

だけど

広い野原に寝転がり

180度の青空を見ていると

あなたが、どこかにいるような気がします

あなたは

あの青い空の向こうにあるひとつ星なのでしょうか

私を優しく包む風なのでしょうか

私をいつも支えてくれる土の一粒?

それとも痛んだ胸を少しずつ癒してくれ静かな闇なのでしょうか?

私の頭の隅には、いつもあなたが笑っています

私の胸には、2人で行つた海岸の潮の香りが今も残っています

私の指や手や腕は、今も誰かを求めています

時が経つても

悲しみの深さはそのまままで
体の奥まで深くえぐっています
だけどあなたとの思い出は
楽しいこと、嬉しいこと、素敵なことばかりで
困ったことや悲しいこと苦しんだことば、ひとつもなかつたような
気がします

(それはたぶん嘘なのでしょうけど……)

私はいい加減な現実主義者で

1日1日をちやんとこなして暮らしています
だけど私は信じています
また、いつか、あなたと会える「」ことを
きつときつと会えることを
私が涙でくしゃくしゃになつても
あなたは涼しい笑顔を浮かべて
私を見つけてくれると信じています

私は
いつか
きっと
あなたと
再び
会えると
信じています

「雑感」 6・10・6

75

人生は不平等だ

日の光すら差別している

運命の意味すら役に立たない

悪いことだらけの人生

嬉しかったことは人生で数えるくらいしかない

虐げられ

辱められ

打ちのめされ

虫けらのように扱われ

なぜ生きる？

薄れゆく意識の中

初めての安息が訪れる

永遠の安らぎ？

それでいいのか？

そんなことが許されるのか？

すべての人間は生きていくわけでは
生存しているわけではない！

僕らはあまりにも不平等すぎて

目を覆つている

カン高い笑い声がこの国を埋め尽くし
無限の色が商品となつて目をくらます

人々は常に移動し、おしゃべりをして、うそぶく
いたるところに地獄が口を開けている
一度足を踏み外すと

みんな大笑いをして喜ぶ

ラブレター 四季 終わりのとき 戰場 君の顔

「ラブレター」 6・10・10

76

真夜中

君は古ぼけたスタンダードライトの明かりの中で
誰に手紙を書いているのだろう
木の机の上には一輪挿し
名も知らぬ野の花
赤と黄色のふかふかのセーターを着て
瞳にかかる前髪を気にもせず
ほおを赤くして
君は誰に手紙を書いているのだろう

「四季」 6・10・10

77

雪解けの風は冷たいけど

春を告げるにおいがすると君は言つた
僕の左腕に右腕を絡ませ、はしゃいでいた

夏の夕暮れ

海はすでに静まり、流れ星が糸を引く
君は何も言わず、空を見上げていた

銀杏並木を歩く

青いブーツで落ち葉を蹴散らし氣取っている
僕のためにマフラーを編んだよと言つて

自分の首を暖めて笑っていた

凍える光を放ちながら星々が降り注ぐ夜
抱き合つても暖まることはないし
キスをして唇は冷たい

君は冷え切った右手を僕のコートのポケットに入れて泣いていた

そう

僕はいつも君といた

「終わりのとき」 6・10・23

78

白い大地は地平線まで続いている

空を流れる雲は

時折、白い月を隠す

世界は

空と大地しかなく

僕らは、ただ見上げている

時はすでに止まってしまったかのようだ

世界は動かない

月の白い光は

悲しげに降り注ぎ

終末を予感させる

僕らは世界に

二人ぼっちで
どこにも行けず、たたずんでいる

白く黒い雲が

現れては去っていく

僕らは涙を流すこともできず

たたずんでいる

「戦場」 6・10・27

79

君と会う

とたんに胃がキリキリと痛み出し
頭が重くなる

すでに疲れてしまっている

僕は君を傷つけるつもりはないし
君も僕を傷つけるつもりはないだろ？

しかし

すでに

お互い

心に鎧をつけ

恐れおののいている

ああ

会う人会う人

敵ばかりだ

僕のまわりにも

君のまわりにも

ナイフを持った奴ばかりだ

僕らは毎日

胸の内から血を流し続けて
のたうちながら生きている
こんなにもたくさんの血を流しているのに
よく死なないものだ

家でも

学校でも

会社でも

公園でも

この世のありとあらゆる場所は

戦場だろ？

ああ、肩の力を抜きたいなあ

何も考えず、君と話ができたらなあ

「君の顔」 6・11・14

80

僕の瞳は黒くて、何だかつまらない
君の瞳は茶色くて、いいなあ

僕の鼻は高いけど、いばつっている
君の鼻は少しだけ低いけど、可愛い

僕の唇は食べるため話すためにあるみたい
君の唇はおいしそうな気がする

僕は頬がこけて神経質

君の頬は急に赤くなつたりする
君の髪は・・・・・

おやすみ 夜の闇に 生還 街 歌

「おやすみ」 6・11・14

81

陽が沈む頃

思い荷物を背負い
とぼとぼと歩く

顔は青白く

うつろな視線は灰色の地面をさまよつてゐる

ず一つとず一つと

疲れていたのだね

君の小さな肩には

その荷物は重すぎて

でも

毎日毎日運ばなければならぬ

口は半ば開いて

吐く息も少ない

身体はどこもかしこもこわばって

今にもバラバラになりそうなんだらつ

ねえ

休んでいいよ

眠つていよいよ

もうギリギリまで頑張ってきたのだから
あつたかい毛布にくるまつて

おやすみ

怖がることはないんだ

君を守ってくれる人はここにもいるし、あそこにもいる

ゆっくり休んでいいんだ

眠るのに飽きたら寝つてもいいし

何かやりたくなるまで何もしなくていい

頭の中のもやもやを少しずつ引っ張り出すために

おしゃべりをするのもいい

夜中の3時になつても聞くことはできるし

朝ごはんのあとだつて大丈夫

このお休みはいつまでかつて?

それは君が決めていいんだよ

それにそんな思い荷物は

どこかに置いてきていいよ

本当だよ

ともかく

僕たちがここにいるから

休もうよ

「夜の闇に」 6・11・17

82

星が銀の光を落とす夜は
君にとって
救いになるのか
静かに迫る闇は君の友だち?
ラジオから流れる
古いジャズピアノ
さらに夜は深まる
時は確実に刻んでいる
恐れることはない
確かに時は進む

どれほ正しこ」レヒ

闇がある」といで

ときには

僕らは語り始める「こと」ができる
歩くこともできる
胸の奥にためていた哀しみを
涙に変えることもできる
そして空を見上げることも

僕は一人ではないのだらう
おやひへ

「生還」 6・12・9

83

君は

崖つぶちで踏ん張り続け
疲れ果ててしまつたけれど
無事生還した

もつおびえることもないし
緊張することもないんだ
身体を癒すには眠ればいい

死の淵はそこいらじゅうにあるし
破壊の弾丸はびゅんびゅん飛んでくる

タフでなければ生き延びることができないからといって
身体を鍛えればいいということでもない

嘘をつき続けることもできないし
笑って目をそらすことも危険だ

大人们に知恵というものがあるのなら
死を見つめなければならぬ

醜く歪んだ世界を

ひとつひとつ解きほぐし

美しい世界へとつくりなおさなければならぬ

冷酷な氷の刃を溶かす

あたたかい風は
必ず吹くはずだ

君は今

おだやかな微笑を浮かべ
まっすぐに僕を見つめ
やわらかな心を届けている

「街」 6・12・12

84

いなくなる
1人ずつ
3人ずつ
5人ずつ
いなくなる
家々はずっと静かなままで

公園では風が落ち葉を舞い上げる
食堂はのれんを上げている
旅館は玄関を閉めている

酒屋にはビールがなく

役場はどこかへいつてしまつた

子どもたちは家に閉じこもり

女たちはつまらなそうにおしゃべりをしている

老人たちは息をひそめる

男たちはよその町で働いている

昔はお日様が照つていたそうだ

今は

いつもいつも

曇り空で・・・・・

ときどき

大通りを風が吹きぬける

「歌」 6・12・16

85

愛することは無駄なのだろうか

信じることは幻?

許することは不可能か

夜の帳が下りて

人は何をすればいい

僕らは何を記憶として持ち続け生きていいくのだろう

星はめぐり

光は去り

僕らは何を胸に抱いて生き続けるのだろう

心は優しさを求めてはいけないのだろうか
心はぬくもりを求めてはいけないのだろうか

心は優しさを求めてはいけないのだろうか
心はぬくもりを求めてはいけないのだろうか

冷たい空氣に息がつまる
血の涙は見えることはない
硬直した身体はどこへも行けない

それでも僕らは
歌を唄いたい
海を見たい
空を飛びたい
自由は真実だろ？

君を想うと悲しいし
あらゆるものに対し叫びたくなる
そして僕は自分の手を呪うのだ
この何もできない両手を

それでも君は
恥ずかしそうに
小さく笑ってくれるね

永遠の道 君と僕

「永遠の道」 7・5・22

僕らは永遠の道を歩いている
どこまでも続く砂の上を
空に浮かぶ雲の上を

風が吹きぬける草原を

スカイタワーが屹立する街を

暗闇の中の荒野を

どこまで行くのだろう

どこに辿りつくのだろう

終わりのない道を歩き続ける

光を求めて

永遠の安息を求めて

約束された場所を求めて

そこは必ず在るはずだと

一人で行くのか

孤独を友とするのか

たつた一人

君がいてくれれば

僕は救われる

たつた一人君がいてくれれば

僕は

すでに

救われている

永遠の道を
終わりのない道を
歩き続ける

「君と僕」 7・6・28

一人は淋しいかい？

凍えた手を

あたたかく包んでくれる人を求めている？

僕は

君のことを知りたいと思っている

かたくなな心は

君じゃなくて

僕の方だろう

だって

君は

ずっと僕を求めて

必死で歩いてきた

声にならない叫びをあげて

その小さな握りこぶしは

立ちはばかる壁を壊そうと

殴り続け

血まみれになつている

僕はまだ

君のことをわかつていないのでつ

僕の言葉は

君をときどき悲しくさせる

君は口を尖らせ

怒っているふりをして

本当は泣いているのだろう?

声にならない声をあげ

涙にならない涙を流し

泣いているのだろう?

君は本当の自由を求め

その自由の重さに身動きできなくなっているのかもしねない

ぼくの「自由」は勝手気ままで

風に流されるまで

白々しく苦に空氣を吸うしかない

本当は

僕が

君から

教えを乞うべきなのだ

最近

やつと

そんなことが少しわかりかけてきた

ねえ

君はそんな僕を

ずっと待ってくれるの?

僕の手は

少し

暖かくなつたのだろうか・・・・・・

「1日」 06・12・27

朝早く起きなければダメだ

朝食をちゃんととらなければダメだ

歯を磨かなければダメだ

ハンカチとポケットティッシュを持たなければダメだ
友達といっしょに登校しなければダメだ

明るく元気よく「おはようございます」とあいさつしなければダメだ

担任の先生を見て、につこり笑わなければダメだ

宿題を忘れてはダメだ

授業中、友だちと話してはダメだ
給食を残してはダメだ

廊下を走ってはダメだ

部活動を休んではダメだ

道草をしてはダメだ

塾を休んではダメだ

「ただいま」と言わなければダメだ
ゲームをしてはダメだ

テレビを見てはダメだ

他愛のないおしゃべりをしてはダメだ

居間で「ゴロゴロ」してはダメだ

マンガを読んでいてはダメだ

宿題をすまなければダメだ

早くお風呂に入らなければダメだ

夜更かしをしてはダメだ

くだらない夢を見てはダメだ

病気をしてはダメだ

立ち止まつてはダメだ

振り向いてはダメだ

遅れてはダメだ

疲れてはダメだ・・・・・

「大根」 7・1・8

畑で大根を一本抜く
大根の命が尽きる
朝日が僕を照らす
これから家に帰つて
この大根を喰うのだ
包丁でぶつた切つて
皮をむき

鍋でコトコト煮て
大根の命を喰うのだ
そうして
僕は

生きている

「東京」 7・2・21

東京

それは銀河系に浮かぶ
超ど級のスペースシップ
スカイタワーの人口光は闇夜を切り裂く
また、それは巨大なブラックホールのように
あらゆるものを受け込み喰らい尽くす
そして、永久運動をする白熱球体のように
情報というベルを纏つた欲望を全世界に発信する

人々は大破局をひそかに予感しながら
狂ったように踊り続いている

東京

秩序と混沌が当たり前のように、奇跡的に存在する
あらゆるもののが満たされ
何ひとつ生み出すものはない
人々は嫌悪し憧れる
人々は希望を託し、恐怖する

東京

それは
世界の中心であり
世界の行き止まり

21世紀の夕食2 許す 学校なるもの

「21世紀の夕食2」 7・2・18

神に祈りを捧げた後

慎ましくも楽しい夕食が始まる

その時

天井で

ミサイルが炸裂し

娘は肉片と化し

妻も息絶えた

僕の左手と左足も消滅し

意識は少しずつ薄れています

穴のあいた天井から夕暮れの空が見える
小さく輝く星は一番星だろうか・・・・・

いつたいこれは何なのだろうか？

この世界に残る最後の思考・・・・・

そうか

これがいわゆる

彼らの「自由と民主主義そして正義」なのだ

この世界における最後の問いかけに

僕は答えた

「許す」 7・2・19

モーシーアルトやマイシュキン公爵のように

元

イエス・キリストや仏陀のように
人はどこまで許すことができるのか

憎しみはたやすく

憎み続けることはつらく

憎しみとともに生き続けることは
体の中に黒い石を持つということ
すべてを許すことは

救いなのか

悲劇は繰り返されるが

人々は許し続けている

それは人が神になるための道なのか？

僕らは

最終的に

許すことが

できるだろうか？

「学校なるもの」 7・3・4

学校では人が殺される

生徒がプールに落ちて死ぬ

真夏に走らされて熱中症で死ぬ

部活動でリンチにあい意識はもどらない

先生は学校が恐くて足がすくむ

子どもたちは頑張りすぎて息切れする

校長先生は教育委員会の動向に反応し

教頭先生は学校を隅々まで見て回る

親たちはこやかに腹の探りあいをし

子どもたちは笑いながら消耗していく

そこは戦場だ！

酸素欠乏症の子どもたち
彼らに注がれた視線の冷たさに呆然とする
そこは軍隊のような規律で
一人ひとりの個性を伸ばす
明るく、さわやかに、元気よく、素直に云々
どす黒い血だまりは毎日そうじされて消えてしまう

本当は誰がまともで

誰がまともでないかなんて
たいした問題じゃがない

学校はもうすっかり

見捨てられてしまっている

もちろん学校に通っている子どもたちも
学校を見限っている

見限つたうえで

楽しそうに通っているだけ

楽しそうに・・・・・

白と黒 発作 時

「白と黒」

この世には白と黒しか存在しない
灰色は消えてしまった
君の好きな青もなくなつた
赤なんて、とんでもない
白と黒しかありはしないんだ

曖昧なことは許されない
すべては規則で決まつていて
「適當だ」とか、「いい加減だ」なんて言葉を言つてはいけないよ

いいかい

物事をきつちりと区切つてしまつんだよ
マニユアルがあるだろ？
それからコンピューターにまかせろ
もうどこにも、空き地はないんだ
月だって火星だって木星だって、所有者はいる

こんなことが分からぬ君は、おかしいよ
時間の外で暮らしているのかい
それとも、まだ、人間つてやつをやつしているのかい
やれやれ
君は本当にわかぢゃいないねえ
君の好きな青なんて

何の役にも立たないじゃないか

「発作」

わざとビールを床に、口にしてみる
それを

犬のようにこまいいつぱって舐める
舌は床のザラザラした感触を楽しみ
血を滴らせる

ほこりと砂と血と混ざったビールを飲む
ああ！ ますい！

夜

ステレオのスピーカーからは
ベートーヴェンのピアノトリオ

俺は今

そんな気分じゃないのに
ベートーヴェンは囁くように
耳から脳へ入ってくる

いつたいいつまで生き続けるのだろう
今と過去は

プツンプツンと分断され

思い出なんかひとつもない

記憶なんか脳が勝手にでっちあげたもので
汚れた爪で頭をかきむしっても

何ひとつ出でこないじゃあないか！

スタンドの光は白々しく

部屋の蛍光灯は薄暗く

落ち着かないけど座っている

夜の闇の中、駆け出して

めぐらめつまう走つてしまえば
おそれく

長距離トライックにはねられて
血の糸を引きながら、宙を舞い
十数秒ほど痙攣して

死んでしまうに違いない

そのほうがキレイさっぱりするし

あしたのことを悩まなくてすむ

でも嫌々眠つて朝おきれば

もちろん、そんなことは忘れている
俺はやつぱり、どうしようもなく
惰性で生きている生き物だ

「時」 8・1・20

星が流れると悲しみが生まれるのだろうか
日が昇ると喜びが湧くのだろうか
風が吹くと恋をするのだろうか

僕らは悲しみの子だ

傷つけあい、蔑みあい、罵りあい、憎みあい、殺しあう・・・・・
誇りという言葉を失い
希望という言葉も失い
愛という言葉も失った

自然の美しさを感じることもなく
命の神祕にひれ伏すこともなく
僕らは生かされている・・・・・

昨日が今日であってもなんの違和感もなく

明日を今日と取り替えても、僕らは気付きもしない

時の始めと終わりがあるとしても

僕らは恐れないのだろう

生と死がともにあることも忘れ

無機物に囲まれた世界で永遠に生きるのだろうか・・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1408f/>

詩集 21世紀の夕食

2010年11月16日01時20分発行